古今要覧稿(ここんようらんこう)巻第五百五十三

●蟲介部(原本蟲部)

てふ　　蝶

てふ一名をこてふ、古名をかはひらこといひ、俗稱をてふてふといひ、京師にてはちよてふといひ、又諸國方言の如きは信濃にてはあまひら或はあまへらともいひ、下野(しもつけ)にてはてふまとよべり。陸奥にてもしかよべり。出羽下野の二國にてふてふばこ、津軽にかにへ或いはかかべ、又はてこなともていこうなともよべり。南部にてはかつかべといひ、越後にてはてふまべつたら、又はらふまべつとうともいへり。又羽州秋田にてはへらこといひ、阿州にてはてふこと名付たり。琉球國にてははへるとよび、蝶にまだらの文あるものはあやはへると稱呼せり。

漢名のごときも數名ああり と雖も、通名は蝴蝶とい蛺蝶といひ蝰蝶といひ蜨ともいへり。説文によるに蝶は俗字のよしにて蜨を本字となせり。然れ共古來より蝶字を以て通用したり。

又雅名の如きは春駒といひ野織といひ撻抹といひ探花使といひ、或いは採花使共採花子とも目せるは名義皆同じくして、いはゆる蝴蝶の花に遊ぶとも花に戯るなど、ふるくより詩歌に詠ぜるよりしてしか名付そめけん。又戀花といふ目もあるは、もと蝶は花木花草中の毛蟲尺蠖の類、或いは蠹蠋老時に至りておのおの脱して蝶となる也。然れどももと生化せし花木花草中をもとめて、もろもろの花上の露を吸領して生活するがゆゑに戀花の名あり。

また此物大小あり。大なるものは蝙蝠の如く故に蝙蝠蝶の名あり、小なるものは梅花瓣にまがふありて、翼に五色の斑文あるあり純白純黄紫黒青赤其色錯雑にして種類きはむべからず。四季にたえずありて花上に飛遊して終に蛹となるものもあり。卵を木枝に殘し或は家屋の軒裏或はひさし等に卵を殘し置て冬の雪霜をしのぎ、春にいたりてをのづから其卵かへりて毛蟲となれり。

さて其毛蟲もさまざまの種類あり。大小ありて色をことにせりしかれども、春早く蝶に化する蟲は舊年の蟲の木葉あるは草根のしげりてかさなりつもりたる中に幸にして雪霜をしのぎ活命なせるもの。春の暖陽の氣をうけて脱して蝶となれるものおほし。又菜に生する裸蟲の化する蝶もあり。これはおほく黄蝶となれり。其蟲は黒きものあり青きものあり茶色或は褐色碧色瑠璃色のものありて、七八分或は一寸ほどの大さなる蟲にして化して蝶となりても、過半はもと蟲にてありしときの色あるものなり。

また形ちもちいさくして美麗なるものなり。いはゆる蝶兒とも村裏來とも菜花子とも黄蝶とも名づけしは此等の小蝶にして、春二月のはじめより三月の末の比まで園林原野或は菜花を尋て菜畑にむれあつまれり。其蝶の文采斑鮎種類はなはだ夥多にして、はかりかぞへがたし。

さて人の蝶になりしことを長明の發心集にかきのせたり。佐國といふひとありて至て花を愛せしが詩を作りて死たりしとぞ六十余國看未飽、他生定作愛花人と云々。後にある人夢に蝶になりて侍ると見たるよし語り侍れば、其子花を心のおよぶほど植てあまづら蜜などを朝毎に灌ぎ侍るとなりかかる事は和漢ともに相似たることあるもの也。いはゆる梁山伯祝英臺の魂、又韓憑夫婦の魂も大蝶となりしよし山堂肆考(さんどうしこう)にみえたり。

また怪異に似たる談話あり。嶺南異物志に、人あり南海に遊びて孤岸に泊せしに物あり。蒲帆のごとく飛て海を過て船にいたらんとす。船人きそひて物を以てこれをうつに、帆のごときものことごとく破砕し地におつ。これをみるに蛺蝶也。海人其つばさあしをさり八十斤の肉を得て、これをくらふに極肥美とみえたり。小蝶にいたりては蚊のごとくなるものあり。これは麥粉の化する所のもの也。麥蝶又揄夾のごときものもあり。且淺褐色にして雲母を點じたるごとく、翅身ともに粉つきたり物にふるれば忽ち落るものなり。

さて世俗に蝶をとらふれば、瘧疾をやむといへる事もゆゑあることなり。堤中納言物語に、てふはとらふればわらはやみせさすなりとあるによれば、いとふるきよよりもい

ひはじめし事にして、實にそのしるしあるものなり。民間の兒童多く蝶あるはとんぼなどをとらへたるものは瘧をやめることままこれあり。夏末初秋のあひだになやめる事田舍に多し。草木の葉或は朽衣物など化して蝶となりし事、北戸録其外諸本草等に見えたり。

至徴の昆蟲たりといへども、天地の造化變易を見るにたれり。且園林花間蝴蝶寒蟬螢火蟋蟀の類なくんばあるべからず。これ詩歌中にかくべからず。四時の山景野趣も此蟲類の爲に美景をそへ、耳をそばだてて歳華のすみやかに流行する事をしり、騒人野客も花間の戯蝶をみては心裏を慰し畫客も花叢を畫きて此蝶なくんば寂寥たるに似たり。

膝王蝶を好みて蛺蝶圖畫をなし、謝逸は蝶詩三百首を作りて人謝蝴蝶とよべり。此物人事におきて無用の物たりといへども、いささか和漢の故事を集めて巻末に圖畫を載して大小蝶の品類を辨別せり。

（注）【詠蝴蝶】北宋・謝逸
狂隨柳絮有時見,
舞入梨花何處尋。
江天春晩暖風細,
相逐賣花人過橋。

古今要覧稿(ここんようらんこう)巻第五百五十四

●蟲介部（原本羽蟲部）

鳳蝶　からてふ

鳳蝶は一名を鳳子といひ鳳子車といひ鬼車といひ鬼蛺といふが如きは皆大蝶の名目にして和名をほほてふと[和名類聚鈔]訓したるは全く音にて稱呼したる也。

後世にいたりてはからてふとよびたり。又近古あげはのてふとよぶものあり。是花草にとまるにも飛遊するにも羽をあげてとびたり。この蝶と鳳蝶とのたがひは尾羽に鳳尾のごときものさがりあるを以てわかてり。又色黒くして形ち大なるものを蝙蝠蝶といひ黒蛺蝶といひ玄武蟬といひ、大黒蝶とも名付たるは漢名なれども和漢ともに稱呼せり。

又其種類もはなはだ多くして黒羽に五色の斑文或は眼のあるものあり。又かみなりてふてふといふものあり。これ羽翼に雲雷文ある蝶を以てかくは名付たり。これ奇蟲にしてまれなる蟲也。

凡蝶類は至て多く斑文の如きは五采雑錯にして、其美粧なるものにいたりては後素の妙工たりといふとも筆端に及びがたきものままこれあるに似たり。これ自然の天工にして人工のおよばざる處なり。これ等の蝶は皆橘蠹蟲の化脱するものおほしといへどもまた蠋蟲よりも化生し尺蠖蟲よりも脱化す。すべてこれらの蝶をさつまにてはやまてふてふといひ、かづさにては地獄蝶々といひ、下野にてはぢごくてふまともいへり。これ漢名に鬼車といひ、鬼蛺といふ名目にひたとあへり。

又蝶に梁山伯、祝英臺とよぶ者あり。黒くして彩あるものを梁山伯といひ、純黄なるものを祝英臺といふと[寧波志]みえたり。これらの大蝶は必ず雙をなして飛遊するが故に梁山伯、祝英臺二人の魂の蝶となれるともいひ、韓憑夫婦の魂なりとも[山堂肆考(さんどうしこう)]いふがごときは皆通俗の僻にして論ずるに足らず。

多年其化脱するものを見るに皆大小の昆蟲或は木葉或は小麥などの化したるは現に其物を見て書論と合考す。

緑蝶

緑蝶は一名を緑女といひ、或は姥蝶といへり。種類大小ありて一様ならずといへども多くは小蝶にして、菁菜花上に戯るる黄蝶の大さのごときものに類して斑文あるものもあり、全く純色なるものもあり、白斑あるものもあり、紅筋あるものもあり、雑文のものもありて、風前に飛遊をなし花上の露をもとむといへども、とらへてみざればその形

狀物色つまびらかに辨じがたし。
　もと此蝶の類は尺蠖蟲の化蛻するもの多けれど、まれには毛蟲もあり、又木葉の化したる事もあり。いはゆる北戸錄に、段公路の南行せしに懸藤峡舟をつなぎ、岩側をみるに一木五綵なるあり。初め丹青の樹といふ僕に命じて一枝をとりうる。まさに軟蝶を綴ること凡二十餘箇翠紺縷のもの金眼のもの丁香眼のものあり云々といふによればまれには木葉の化生するものもあるなり。先年日暮里道灌山の欝林中に木葉半ばは蝶に化しかかれるものをとらへし事あり。これらの化蝶はまれなるべけれど物化の變化は、はかりしるべからず。

紺蝶

　紺蝶は一名紺幡といひ又童幡とも(按に蜻蛉を紺幡ともいへどもここは紺蝶を名付けたるによりてここにのせたり)いへり。和名類聚鈔(わみょうるいじゅうしょう)兼名苑を引て其名を出せれど、和名はみえねば當時より今にいたるまで紺蝶を通名とせり。また古今注には天雞といふ名目もみえたれど、此蝶は蝶の中にもいたつてまれなるものにして奇品なり。
　北戸錄に木葉の化して蝶となれる中にも、翠紺縷なるものとあるによれば木葉の化生もあるべけれど、より多くは脱化するなり。志かれども大蝶はなく小蝶のみ見侍り。黑斑黑點のものもあり純紺色のものもあり、其種類多からざれば一二品の寫生を得てここに載するのみ。